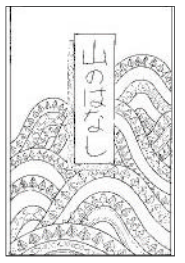
あしやの民話⑤ 金兵衛車やけ車



●文・あしや民話の会
●絵・竹本温子さん

あしや川の上流にある水車谷は、むかし、たくさんの水車があったところや。

その水車では、お酒を造る元のお米をついとった。そのお米で、できたお酒は、京の都の御所などに納められるとあって、水車は、特別の扱いを受けとった。

水車で働く人も、あしやの人だけでなく、遠くの村から選ばれた人が来ておった。

ある年のことや、水車のひとつ、金兵衛車に、丹波から若者が来ることになった。

若者には、つね日ごろ、大そう仲ようしている娘がいた。美しい、気だてのええ子やった。若者があしやに行くと聞いて、

「えっ。あしやへ働きにいくって、本当かえ」

「そうじゃ、わしは選ばれたんじゃ。家のものも、みんな、名誉じゃと喜んでおる。」

「いいえ、決して行かないでおくれ。行くなら、わたしも連れていっておくれ。」

「何をいう。そんなこと、できるわけがない。」

若者も、娘と別れるのがつらかった。できることなら、娘と一緒にここにおりたかった。

しかし、とりすがる娘をふり切るようにして、あしやに行ってしもうた。

ひとり残されたむすめは、毎日、悲しくて泣いてばかりしておった。

そして若者を思い、食事ものどに通らないようになった。両親は心配した。

「娘や、あしやに行ってしもうたような者のことなど、忘れておくれ。

それより、ええ嫁入りの話がある。どれも、ええ男ばっかりじゃ。家がらも、ずうっと上じゃ。」

そういっては、お見合いをさせ、あしやに行った男のことなど、忘れさせるようにしておった。

しかし、娘は耳をかさず、どの話も断る始末。両親も、ほとほと困ってしもうた。

ある日のこと、娘は、若者に会いたい一心で、黙って家を出た。

夜、暗いうちのことやった。

丹波とあしやの間には、六甲の山がふさがるように、そびえていた。

まっ暗な山の中、のぼり坂をひた走りに走った。遠くの野犬の声におびえ、泣き出したいのをこらえて走った。

きちんと結い上げてあった髪は、バラバラに乱れ、着物は、けつまづいたかビリビリにさけ、足は血まみれになっていた。

苦労に苦労を重ね、やっとあしやにたどりついたものの、娘にとっては、まったく知らん土地やった。

（水車は川にある）

そう思って、川をさがした。川辺に立った娘は、ありったけの声でさけんだ。

「金兵衛車（きんべえぐるま）を知らんかあ。金兵衛車はどこじゃ。」

その声はあたりの谷にひびき、こだまが返ってくる。

その声に気づいた親切な村人が、娘を金兵衛車に案内した。

娘は、夢のようだと喜び、連れてきてくれた村人に厚く礼をいった。

金兵衛車の前に立った娘は、はやる心をおさえながら、いとしい人の名を呼んだ。

しばらくして、戸があいた。

出てきたのはなんと、この水車小屋の主人、金兵衛であった。

金兵衛は、じろりと、つめたい目で娘をみた。そして「ふふん」と、いじわるそうに笑った。

「おまえが、だれかは知らんが、この水車で働いとるもんには、だれも、会わせられん。」

つきはなすようにいった。それどころか、

「ここの米は、だいじな酒になるのじゃ。この川で身を清め、米をついとるのやから、つき上がるまでは、会わせられん。」

と、酒米をつくことの大切なことばかりをいった。娘は、悲しくて、悲しくて、若者の名を呼び続けた。そして、

「お願いです。一目、一目だけでも、会わせてください。」

なんども、なんども、頼んだ。

しかし金兵衛は、首を横にふるばかり。

「いくら泣いてたのんでもむだじゃ。とっとと帰れ。」

鬼のような金兵衛のことばに、ほとほと困り果てた娘は、水車を後にし、山手へ走りこんでいった。

しばらくしてあらわれたとき、両手にサカキの小枝を持っていた。

もう、娘は、普通の人ではなかった。長い髪の毛をふり乱し、若者の名を呼びつづけた。

それでも、果たせぬとわかると、大きな声で呪文（じゅもん）をとなえ、金兵衛車のまわりを、サカキの小枝をかかげて、まわりはじめた。

目はランランとあやしく輝き、白い顔と着物からはみでた手も足も血のけがなく、まるでろう人形のようであった。

そのうち、ぐるぐるまわっている娘の全身から、青白い光がではじめた。

そして、まっかな炎に変わっていった。

その炎は、娘の体を包み、渦となって小屋のまわりをまわりはじめた。

炎の渦は、金兵衛車を残して空に舞い上がり、やがて、それも消えた。

その夜、だれが火をつけたのか、金兵衛車も、燃えはじめた。

あれよ、あれよと、人びとが見守るなかで、火の車となった金兵衛車は、空中に浮かび、炎の舞いを見せ、やがて、やみ夜のかなたに消えていったという。

ふしぎなことに、金兵衛車の主人も若者も、そして、水車小屋の中のからうすでさえも、この世に何ひとつ残さず、消えていったそうな。

この話を、子どもたちは「金兵衛車、やけ車」と歌ったという。

そのころの他の水車小屋で使っていた石うすは今に残り、六甲山ののぼり口、あしや川のすぐそばの民家の石がきにはめこまれて、今もそのむかしを伝えている。

●「あしやの民話」は、芦屋に語り伝えられていたお話を、三好美佐子先生をはじめ、民話を研究するグループの皆さんが収集整理して、やさしく民話の形に整えられ、平成十一年に発行されたものです。

美術博物館「関西文化の日」

問い合わせ　美術博物館　☎38-5432

関西の２府７県３政令市と経済団体で構成する「関西広域連携協議会」では文化庁長官が提唱した「関西元気文化圏構想」の一環として、美術館・博物館等の文化施設の無料開放を行う「関西文化の日」事業を実施しています。

本市でも、11月18日(土)・19日(日)の両日、美術博物館の催しを無料でご観賞いただけます。

【「関西文化の日」の美術博物館の催し】

■開館時間　午前10時～午後５時(午後４時30分までに入館してください)

■展示内容　大坂慕情～なにわ四条派の系譜～

「富田砕花旧居」臨時休館のお知らせ

富田砕花旧居(宮川町4-12)

兵庫県文化の父ともいわれ、情熱の詩人でもあった富田砕花旧居は、毎週水曜日と日曜日に開館し、展示資料や建物のたたずまいを楽しんでいただいています。

このたび12月１日から来年３月31日までの水曜日に限り、臨時休館いたします。

なお、年末12月31日を除く毎週日曜日の午前10時から午後４時(入館は午後３時まで)は従来どおり開館していますので、お気軽にご来館ください。入場は無料です。

谷崎潤一郎記念館の催し

問い合わせ　谷崎潤一郎記念館　☎23-5852(伊勢町12-15)

【ロビーギャラリー】「森茂子水彩画展」11月23日～12月23日

市役所ほか、箱根彫刻の森美術館やモンテベロ市にも作品が所蔵されている画家・森茂子さん(仁科会会員、日本美術家連盟会友)の水彩画を展示。※最終日は、午後３時まで。

【文学館講座】「源氏物語」講座

■日程　11月17日・12月15日・１月19日・２月16日・３月16日・４月20日(第３金曜日)午前10時～11時30分　■会場　市民センター401室　■講師　京都橘大学名誉教授･鈴木紀子氏　■受講料　各回1,000円(申し込み時に６回分支払い)　■定員　120人

【文学館講座】「和泉式部日記」講座 ＜全６回＞

■日程　11月２日・12月７日・１月18日・２月１日・３月１日・４月５日(第１木曜日)午前10時30分～正午　■会場　谷崎潤一郎記念館　■講師　京都橘大学名誉教授・鈴木紀子氏　■受講料　各回2,500円(申し込み時に３回分支払い)　■定員　20人

【文学館講座】「日本の伝統俳句」講座

■日程　11月25日・12月23日・１月27日・２月24日・３月31日・４月28日(第４土曜日)午前10時～11時30分　■会場　谷崎潤一郎記念館　■講師　ホトトギス同人・黒川悦子氏　■受講料　各回2,500円(申し込み時に３回分支払い)　■定員　20人

【文学館講座】「楽しくスケッチ」講座 ＜全６回＞

■日程　11月22日・12月６日・12月20日・１月10日・１月24日・２月14日(第２・４水曜日)午前10時～正午　■会場　谷崎潤一郎記念館　■講師　ＪＲ西日本ジパング倶楽部講師・井上正三氏　■受講料　各回2,500円(申し込み時に３回分支払い)　■定員　20人

【文学館講座】「あなたの思い出を物語に」文章講座＜全６回＞

■日程　11月23日・12月21日・１月25日・２月22日・３月29日・４月26日(第４木曜日)午後２時～３時30分　■会場　谷崎潤一郎記念館　■講師　大阪芸術大学講師・篠原嘉彦氏　■受講料　各回2,500円(申し込み時に３回分支払い)　■定員　20人

市制施行50周年記念写真集「芦屋のうつりかわり」を頒布

写真でみる芦屋の歴史

市制施行50周年(平成２年11月10日)に発行した記念写真集「芦屋のうつりかわり」の在庫本を、行政情報コーナー(市役所北館１階)、ラポルテ市民サービスコーナーで頒布しています。

「芦屋のうつりかわり」
21.6×30.5cm／135頁／
紙表紙･銀箔押し(ハードカバー)
頒布額　500円

モンテベロ市から代表を迎え、姉妹都市提携締結を祝う市民　(昭和36年５月24日・市役所前広場)

問い合わせ　広報課　☎38-2006